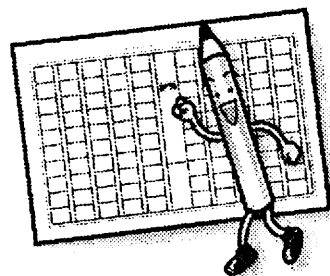


(国語科)

# 書く楽しさを味わう作文学習の工夫

—短作文を書くことを通して—



浦添市立浦城小学校 新城 徳子

## 目次

I	テーマ設定の理由	1
II	目指す児童像	2
III	目指す授業像	2
IV	研究の目標	2
V	研究の仮説	2
1	基本仮説	2
2	作業仮説	2
VI	研究構想図	2
VII	研究内容	2
1	作文学習の意義	2
2	意欲的に取り組ませる指導	4
3	短作文について	4
4	帯単元について	4
5	短作文の効果的な指導	5
6	交流する場の工夫	5
7	年間指導計画について	7
VIII	授業実践	10
1	単元名	10
2	学習材	10
3	単元目標	10
4	単元について	10
5	単元学習計画	12
6	本時の学習	13
IX	結果と考察	15
X	研究の成果と課題	19

# 書く楽しさを味わう作文学習の工夫

## —短作文を書くことを通して—

浦添市立浦城小学校 新城 徳子

### 【要約】

本研究は、作文を書くことに意欲的に取り組み、そして自分の思いや考えを進んで表現ができる子の育成をめざし、学習の工夫や指導方法について研究したものである。

授業実践では、短作文を通して題材や学習方法を工夫したことで、作文に抵抗を感じていた子が楽しんで書いている姿が見られた。また実践後の感想から、作文を書くことへの抵抗が薄れたのではないかと考える。

### キーワード

- 小学校国語       作文学習       短作文       帯単元  
 題材の選択

## I テーマ設定の理由

新教育課程がスタートし、「生きる力」の育成が提言された。その中で「自ら学び、自ら考える力を育てる」「基礎・基本の定着」「個性を生かす」などの教育の充実が求められている。

国語科の目標においては「表現する能力」の育成が最初に位置づけられ、自分の考えを自分の言葉で積極的に表現する能力や態度が重視されている。それを受けて国語科の内容は「A話す・聞くこと」「B書くこと」「C読むこと」の三領域と「言語事項」に改訂された。とくに「書くこと」においては、国語の時間で培われた力が、国語科の枠を超えて他の教科や生活の中で生かされ、生きて働くといわれている。それは、他教科において学習したことをまとめたり、日常生活のあらゆる場面で文章を書く機会が多いからである。今、適切な文章表現ができる児童を育成することが求められているのである。

その文章表現力を高めることのできる方法の一つに作文学習があると考え。

これまでの作文の授業では子ども達は、「何を書いていいか分からない」「考えるのがめんどうくさい」と抵抗が大きく、さらに上級学年に進むにつれて作文を書くことを嫌がる子が多くなるのが現状であった。それは、子どもが楽しく書きたくなるような、そして個に応じた授業ではなかったからだと考える。どのような指導をすれば意欲的に書かせることができるかという課題を踏まえて、これまでの子どもが「書かされている」という意識を持たせがちな作文学習から「書きたい」「だれかに伝えたい」という意欲が育つ指導法を工夫していきたい。そして何よりも、書くことに対する抵抗を取り除き、楽しんで書くうちに作文の力が身につく授業をしていきたいと考えている。

そこで本研究では、3学年の子どもが楽しみながら書く力を身につける作文学習のために短作文を計画的・継続的に書くことを通して、意欲がわいてくるような学習内容や指導方法の工夫について研究をしていきたいと考え、この研究テーマを設定した。

## II 目指す児童像

作文を楽しく書くことができ、自分の思いや考えを進んで表現できる子

## III 目指す授業像

子どもが楽しみながら作文学習に取り組み、書けた喜びを感じると同時に書く力を育む授業

## IV 研究の目標

自分の思いや考えを進んで表現することができるために、子どもの興味・関心のある学習内容や学習の工夫及び指導方法について研究する。

## V 研究の仮説

### 1 基本仮説

子どもの実態を把握し、興味・関心を取り入れた題材や指導方法を工夫することにより、書く意欲が高まり、進んで書くことができるであろう。

### 2 作業仮説

- (1) 子どもが書きたくなるような題材を取り入れ、個に応じた指導を工夫すれば、書くことに対する抵抗が薄れ、楽しんで書くことができるであろう。
- (2) 短作文学習を帯単元に位置づけ、年間を通して教科書単元と関連させながら指導していけば書く力が育つであろう。
- (3) 書いた作文を交流する場を設定することにより、友達の良さを認め合うことができ、書く意欲も高まるであろう。

## VI 研究構想図

次ページに記載

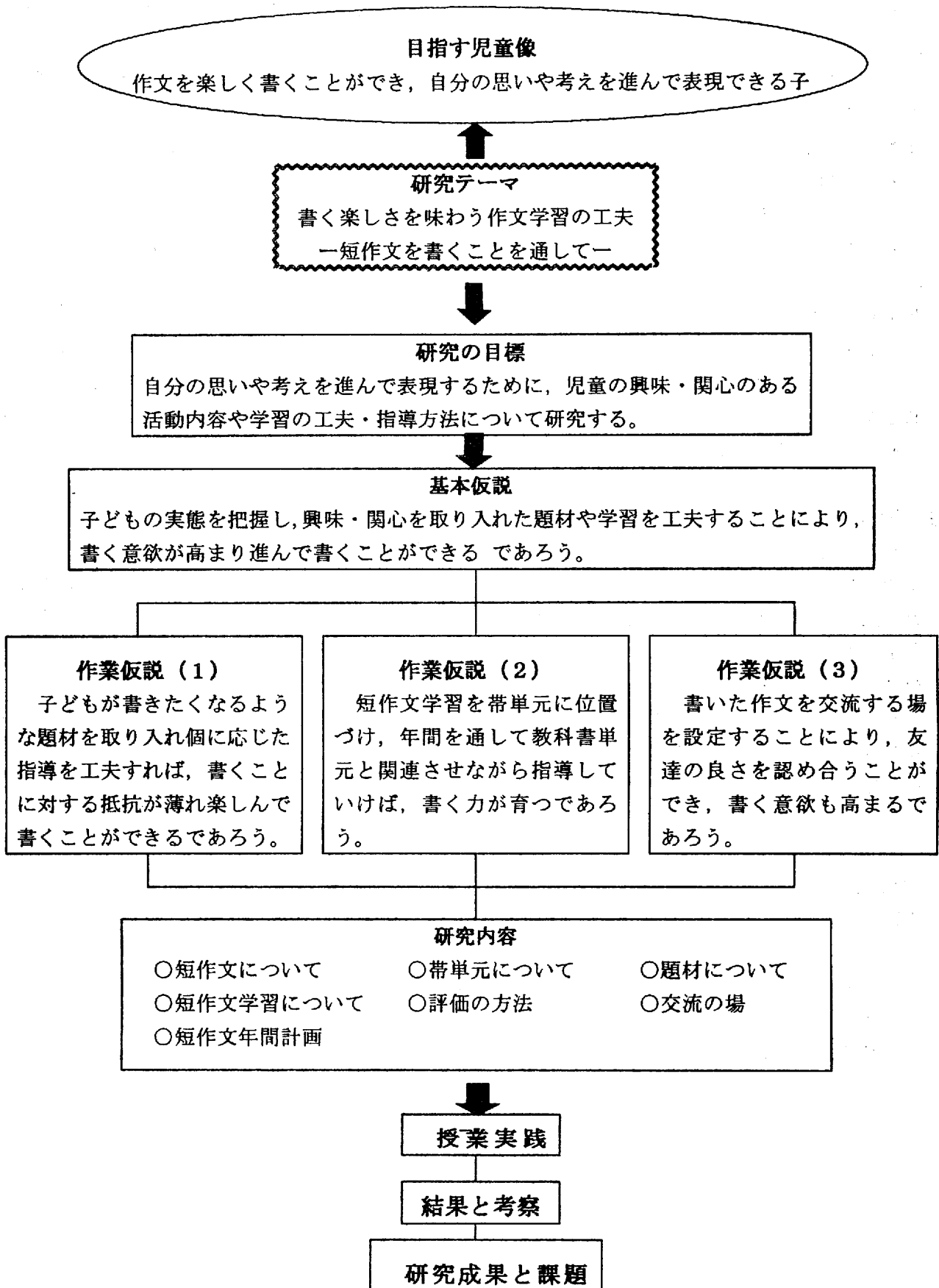
## VII 研究内容

### 1 作文学習の意義

指導要領の国語科の目標で、今回新たに「伝え合う力を高める」が加えられた。伝え合う力とは「互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通して適切に表現したり、正確に理解する力」とある。つまり、言葉を使って相手にうまく伝えるように工夫したり、相手の伝えていることを正確に理解したり、そして伝え合うことでお互いの考えを交流しあい高め合っていくことと解釈する。その伝え合う能力は、「話す・聞く・書く・読む」という活動すべてにおいて培われるものであるが、その中でも「書くこと」はどの領域ともつながりがあり、果たす役割は大きいと考える。

書くことは、話す内容を事前に書きまとめることで筋道を立てて話す力を高めることにつながり、聞いてメモを取ることによって正確に理解する力を高めることができる。また、読んだことを文章にまとめることで目的に応じて読む力を培うこともできる。さらに文章を書く活動は、他の教科や日常生活でも行われており、すべてのことの基礎・基本になり作文学習の意義は大きいと考える。

## 研究構想図



## 2 意欲的に取り組ませる指導

どの子ども書きたいことがあり「書けた！」という喜びや満足感を得る作文の授業は、子どもたちにとって楽しいことである。

子どもが意欲的に取り組むには「書きたい！」という気持ちにならなければならない。まず何よりも書く楽しさを体感させたい。そのためには、書いてみたくなるような題材に出会うこと、読ませたい相手がいる、自分の書いた作文が喜ばれているという実感を味わうことが大切である。そこで興味・関心の持てるような学習活動の工夫と書く力をつける工夫をすることが必要である。

これまでの指導は、作文を書くことに構えすぎてしまい、子ども達は意欲的にそして楽しく書くことができなかつた。もっと気軽に楽しく書くには、興味のある題材から入っていくことが必要であった。書きたいことを書いたほうが子どもにとって気軽に取り組めるのではないかと考える。また作文への抵抗を取り除くためにも気軽に書ける短作文学習が望ましいと考える。そして単発的でなく単元の中でどのような作文力を育てたいのか明確にしながら、年間を通し繰り返し指導していくことで定着が図れるであろうと考える。指導にあたっては、あまり書くための技能を前面に出し過ぎないようにして、楽しく書くことを大事にしていきたい。上手くなくてもいいから自分の言葉で書くことに慣れることが必要である。

## 3 短作文について

短作文とは短い文章を書くことであり、一般的には四百字以内を分量としている。できるだけ書く機会を多く設けるようにし、短い時間で短い文章を書くことを継続して行いたい。作文を書くことは国語の授業だけに限らず朝や帰りの短い時間にも指導できる。短時間・少分量であるので苦手な子ども負担にならずに書ける。書くことを多く経験することで書き慣れるようになる。そして書き慣れることによって抵抗感がなくなり書く意欲が出てくるのが期待できる。

そして短作文で培った力は教科書単元の中でも生かすことができ、さらに教科書単元の学習を短作文学習で補うことができるのではないかと考える。そのためには教科書単元と短作文年間計画の扱いを工夫していきたい。その際、内容によっては、2単位時間をひとまとまりにして扱ったり、1単位時間のうち15分程度を毎時間継続した形で充てたりすることも必要である。

## 4 帯単位について

### (1) 帯単位とは

帯単位とは帯のように細く長く続けて展開する単元のことで、つまり短い時間で継続的にあつかう単位ということになる。したがって、年間を通して教科書単元と関連させながら位置づけて指導していくことにする。(短作文年間計画をP9に記載)

### (2) 帯単位の意義

- 短い時間(朝のドリルの時間・帰る前)を有効に使って指導できる。
- モジュール制時間では、15分や30分単位の時間を組み合わせて行うことが可能である。
- 計画の中にスキル学習や学び方を位置づけることができる。
- 国語の作文単元での弱い部分を取り立てて指導することができる。
- 体験活動と関連させ、その都度指導できる。
- 読む・書く・話す・聞く等の活動と段階的・継続的にわたって位置づけることができる。

## 5 短作文学習の効果的な指導

作文の苦手な子の負担を少しずつ取り除くための指導

### (1) 題材の工夫

子どもたちが喜んで書く題材を用意する。興味・関心を第一に考えると次の3点が大切である。

- ・身近なもの
- ・好奇心をそそるもの
- ・経験したことのあるもの

### (2) 相手意識・目的意識を明確にする

自分が書いたものを誰かに読んでもらえる・聞いてもらえるという確約があると、子どもは書く意欲が倍増する（手紙作文などは効果的である）。また何のために書くのかが、はっきりしていると子どもの書く意欲は次第に高まっていく。目的がないと「させられている」という意識を持つ。

### (3) 参考作文の紹介

書き表し方がわかり、子どもたちがこれから書こうとすることについて自分なりに「見通し」がもてることが大切である。作文を読んだり聞いたりすることによって子どもたちは、およその見通しができ安心して書いていく。

### (4) ワークシートの工夫

原稿用紙だけでは抵抗があるものである。子どもの書く意欲をかき立てるようなワークシートを作成することによって、気軽に取り組めるようにする。段落ごとまたは場面に合わせたワークシートを工夫すれば、イメージがまとまり、だらだら文でなく、まとまった文が書ける。

### (5) 短時間で書きたいことを書かせる

時間になったら、無理に最後まで書かせずに途中で終わらせることが大切である。気持ちが楽になり、時間内にたくさん書けることに喜びを感じるのである。これを繰り返すことで、だらだらと長く書くことがなくなり、書きたいことをまとめて書くようになる。

## 6 交流する場の工夫

### (1) 交流の場

#### ① 読み合う

書いた作文をいくつか取り上げ、みんなで読み合い話し合う。よく書けているところを見つけたり考えたりすることで書き方を学び合うことができる。教室で生まれた作文なのでコミュニケーションもさらに深まる

#### ② 文集

これまでに書いた作文をつづり、友だちと交換して読み合ったり家の人に読んでもらう。その後に感想や意見などを交わすことにより交流が生まれる。

#### ③ 手紙

手紙を書くということは相手意識を持つということである。伝えたい相手に、自分の思いやできごとを話すように書くことができる。手紙を出した後には、返事をもらう喜びも味わうことができる。

#### ④ 作文掲示

紹介コーナーを設けて掲示し書く意欲をかきたてる。苦手な子であればあるほど、よく書けている言葉にしるしをつけるなどして自信をもたせたい。どんな文でもその子らしい見方や感じ方が表れるものである。

#### ⑤ 壁新聞 絵本 詩集 紙芝居 カルタ遊び 等がある。

### (2) 評価の方法

子どもたちは、努力して書き上げた作文が認められ受け入れられることを早い時期に知りたいたいものである。「認められた」という実感が、成就感をもたらし次への意欲を喚起したり持続したりするのである。読み手として子どもたちを「評価する立場」に立たせることも作文指導で行う大切な指導の一つである。書き上げた作文を紹介し合い、子どもたちが相互評価し合う場を学習計画の中に位置づけるようにする。

#### ① 自己評価

自分で評価し修正する経験を重ねる中で、書く力は伸びていく。そこで書く前にめあてを立て、書いた後めあてにそって自己評価しながら自分の学習を振り返る機会を作ることが必要になる。その後、修正が必要な部分について自ら考え、推敲していくことができれば、自己解決の喜びを実感することができ、自信もついていくだろう。その際評価の観点を決めて自己評価する。

- ・誤字・脱字はないか。
- ・句読点は正しく打ってあるか。
- ・「 」の書き方は正しいか。
- ・改行はできているか。
- ・題名とあった内容か。

#### ② 相互評価

相互評価をすることで、友達に認められる喜びを味わい、また友達の書いたものを読むことによって、表現のよさにふれたり、友達を認めることにもつながる。教師は、相互評価を見ることにより、いろいろな角度から子どもの様子を知ることができる。

#### ③ 評語

出来上がるまでの過程が学習の評価として大切であり、句読点や言葉の誤りは最小限にとどめる。その事に執着すると、子どもの表現意欲をそそぐことになる。子どもにとって教師の評語（赤字）は学習の意欲につながる。感想・意見・質問を入れると、教師と子どものコミュニケーションが図れると同時に、書く意欲へとつながる。



## 7 年間計画について

### (1) 短作文年間計画の作成にあたって

学習指導要領で「書くこと」の指導については、文章表現能力を養うことに重点を置いている。3・4学年の「B書くこと」に関する時間は85時間あり、実際に文章を書く活動をなるべく多くしたり特に取り上げて指導することとされている。P9に記載されている短作文年間計画は下記の指導内容と次ページの評価規準に基づいて作成した。

表 学習指導要領のB領域「書くこと」

	書くことの日標	指導内容
一 二 学 年	経験したことや想像した事などについて、 一 順序が分かるように、語や文の続き方に ・ 注意して文や文章を書くことができるよう 二 にするとともに、楽しんで表現しようとする 学 態度を育てる。 年	ア 相手や目的を考えながら書くこと。 イ 書こうとする題材に必要な事柄を集めること。 ウ 自分の考えが明確になるように、簡単な組立て を考えること。 エ 事柄の順序を考えながら、語と語や文と文の続 き方に注意して書くこと。 オ 文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違い などに注意すること。
三 ・ 四 学 年	相手や目的に応じ、調べた事などが伝わる 三 ように、段落相互の関係などを工夫して ・ 文章を書くことができるようにするととも に、適切に表現しようとする態度を育てる。 四 学 年	ア 相手や目的に応じて、適切に書くこと。 イ 書く必要のある事柄を収集したり選択したりす ること。 ウ 自分の考えが明確になるように、段落相互の関 係を考えること。 エ 書こうとする事を中心を明確にしなが、段落 と段落との続き方に注意して書くこと。 オ 文章のよいところを見つけたり、間違いなどを 正したりすること。
五 ・ 六 学 年	目的や意図に応じ、考えた事などを筋道を 立てて文章に書くことができるようにする とともに、効果的に表現しようとする態度 五 を育てる。 ・ 六 学 年	ア 目的や意図に応じて、自分の考えを効果的に書 くこと。 イ 全体を見通して、書く必要のある事柄を整理す ること。 ウ 自分の考えを明確にするため、文章全体の組立 ての効果を考えること。 エ 事象と感想、意見などを区別するとともに、目 的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたり すること。 オ 表現の効果などについて確かめたり工夫したり すること。

(2) 基礎的・基本的事項 (3・4年)

- ア 書く相手や目的を意識し、文字言語によって伝え合うことの良さを味わうこと。
- イ 自分の考えを明確にするために、必要な材料の収集を行ったり順序や軽重を考えたりすること。
- ウ 自分の考えや相手に伝えたい事柄の中心を、明確にする構成を工夫すること。
- エ 段落段落との続き方に注意して、文脈の通った文章を書くこと。
- オ 文章を読み直して、間違いなどを正してよりよい文章にすること。

(3) 書くことの評価規準

国語への 関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手や目的に応じて、事柄の選択や段落相互の関係を工夫したり、よいところを見つけたりしようとしている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手や目的に応じて、適切に書いている。</li> <li>・書く必要のある事柄を収集したり選択したりしている。</li> <li>・自分の考えが明確になるように、段落相互の関係を考えて書いている。</li> <li>・書こうとする事の中心を明確にしなが、段落と段落との続き方に注意して書いている。</li> <li>・文章のよいところを見つけたり、間違いなどを正したりしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当該学年の前の学年までに配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、当該学年に配当されている漢字を漸次書いている。</li> <li>・漢字のへん、つくりなどの構成についての知識をもっている。</li> <li>・日常使われている簡単な単語について、ローマ字で書いている。(4年)</li> <li>・送り仮名に注意して書いている。</li> <li>・句読点を適切に打ち、必要な箇所は行を改めて書いている。</li> <li>・<u>表現するために必要な文字や語句について、辞書を利用して調べる方法を理解している</u></li> <li>・<u>文章全体における段落の役割を理解している</u></li> <li>・<u>文と文との意味のつながりを考えながら指示語や接続詞を使っている</u></li> <li>・<u>文章の敬体と常体に注意して書いている</u></li> <li>・文字の組み立て方に注意して、文字の形を整えて書いている。</li> <li>・文字の大きさや配列に注意して書いている。</li> <li>・毛筆を利用して、点画の筆使いや文字の組み立て方に注意しながら、文字の形を整えて書いている。</li> </ul>

\* 言語についての知識・理解・技能の波線部分は文章表現に関わる内容である。

短作文年間計画

月	単元	ねらい	学習材	主な学習活動	培う力	評価規準
4	鉛筆が進むよ	<ul style="list-style-type: none"> <li>進んで書きたい場を設定するところをもとに興味をもつて気軽に書くことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>友達インタビュー</li> <li>先生迷わないでね</li> <li>おしやべり鉛筆</li> <li>〇〇をさがせ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>友達の知りたいことをインタビューする</li> <li>学校から家までの地図を文で書く。</li> <li>二人で交代して会話文を書く。</li> <li>対象を言葉で表現する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>情報を集める。</li> <li>大事な事を落とさない。</li> <li>会話に「」を使う。</li> <li>対象をよく観察する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>書く情報を集めている。</li> <li>書く事柄を選択している。</li> <li>会話の部分に正しく「」をつけている。</li> <li>書くことと対象をよく見つけている。</li> </ul>
6		<ul style="list-style-type: none"> <li>句読点や「」のきままりを確かめ、それを入れた中に取ることができている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>朝おきたら</li> <li>スケッチ作文</li> <li>箱の中身は？</li> <li>どきどき大作戦</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>空想したお話を書く。</li> <li>対象を言葉で表現する。</li> <li>箱の中の具体物を説明する。</li> <li>友達の良いところを見つけて書く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>始め・中・終わり</li> <li>観察した通り書く。</li> <li>表現方法を工夫する。</li> <li>情報を集める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>簡単な文章構成を理解している。</li> <li>書くことと対象をよく見つけている。</li> <li>様子がよくわかるようになっている。</li> <li>書く情報を集めている。</li> </ul>
7		<ul style="list-style-type: none"> <li>書き表し方が分かり、想像豊かな発想や表現ができる。</li> <li>推敲することができている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>言葉が広がる</li> <li>おにたのこことを話すね【教科書単元】</li> <li>未来予想作文</li> <li>読書おすすめ</li> <li>手紙作文【教科書単元】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>イメージマップを作りながら言葉を集める。</li> <li>「おにたのぼうし」のその後を書く。</li> <li>運動会の出来事を想像して書く</li> <li>自分の好きな本の紹介を書く。</li> <li>社会科や総合学習でお世話になった方へ手紙を書く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>イメージや語彙を広げる。</li> <li>考えや思いを表現する。</li> <li>表現方法を工夫する。</li> <li>中心をわかりやすく書く。</li> <li>進んで手紙を書く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>表現するために必要な語句を増やしている。</li> <li>楽しみながら物語を書いている。</li> <li>様子がよくわかるようになっている。</li> <li>読み手を引きつける書き方をしている。</li> <li>相手や内容に適した表現で書くことができる</li> </ul>
9	鉛筆が広がれ	<ul style="list-style-type: none"> <li>段落のきままりを知り、それを書くことができる。</li> <li>適切で的確な表現ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>4コマまんが</li> <li>まとまりを考えて【教科書単元】</li> <li>わたしのメモユニット</li> <li>トランプのポケット</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>4つの絵を見てストーリーを作る。</li> <li>絵を見てストーリーを作る。</li> <li>おやつのレストランを順序よく書く。</li> <li>欲しい道具の活用方法を説明する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>起承転結で書く。</li> <li>事柄のまとまり</li> <li>順序よく説明文を書く。</li> <li>効果的な説明</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>段落相互のつながりを考えている。</li> <li>段落相互のつながりを考えている。</li> <li>読み手に分かるように説明を書いている。</li> </ul>
11	鉛筆まとまる	<ul style="list-style-type: none"> <li>一年間のまとめとして総合的な表現ができる、生活の中で生きている働く文が書ける</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>かるた作り</li> <li>4コマまんが</li> <li>頑張ったわたし</li> <li>思い出つづり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>絵を入れたかるたを短作文で書く。</li> <li>4つの絵を見てストーリーを作る。</li> <li>学芸会で頑張ったことをお家の人へ知らせる。</li> <li>思い出の中で印象深いことを書く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>表現方法の工夫</li> <li>起承転結で書く。</li> <li>中心をわかりやすく書く。</li> <li>書きたい中心を書く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>様子がよくわかるようになっている。</li> <li>段落相互のつながりを考えている。</li> <li>伝えたいことの中心を明確にして書いている。</li> <li>整理して文章を書いている。</li> </ul>
12	文いろいろ					

## Ⅶ 授業実践

### 1 単元名 鉛筆が進むよ

### 2 学習材

- 朝目がさめると、なんと・・・
- えんぴつおしゃべり
- スケッチ作文（教室編・校庭編）
- もしも校長先生だったら
- わたしの好きなもの

### 3 単元目標

- (1) 興味関心の持てる題材を設定することにより、書くことに抵抗がなくなり作文に興味を持つことができる。
- (2) 互いの作文を読み合うことにより自他を認め、またその作文について話し合うことにより、自他の向上を図ることができる。

### 4 単元について

#### (1) 学習材について

児童の興味関心を取り入れた題材をテーマにして書くことにより、文を書くことに対し抵抗が薄れ、作文を進んで書くことができるようになる事をねらいとしている。

#### ○朝目がさめると、なんと・・・

「朝目がさめると、なんとわたしの体は○○になっていた。」で始まる文である。

立場を変え、視点を移動しての想像の世界をえがく変身作文である。子どもは、童話などの読み物から影響を受けてしぜんにこうした態度に導かれるのが少なくない。変身作文は擬人化でもあり、1・2年生には難しい面もあるが、3・4年生になるとこの態度はいちだんと発達し関心も増してくる。一方、科学的な観察の態度も伸びてくるので、表現は質量を増してくる。

#### ○えんぴつおしゃべり

作文に抵抗を感じる子どもでも、えんぴつ対談だとさほど抵抗なしに楽しめる。文章体で書かないで日常の会話形式で気軽に取り組めるからである。低・中学年で文章への抵抗をなくすことがねらいであり、書くことの基礎練習としては好適の方法である。

#### ○スケッチ作文

対象を文字で表現する「文字・文による写生」である。そのねらいは、対象を正しく観察することである。事物の状態・性質・変化などありのまま認識することで、それが言葉と結びつ表現されることである。

また文章表現力の上からいえば、見たものをそのとおりに書くという基礎基本の育成である。まず見ることから始め、見たをもの文字に移すという訓練の積み重ねを大切にしなければならない。書くことがないとか、どう書けばよいか分からない子に対してスケッチ作文は取り組みやすいだろう。

○もしも校長先生だったら

この作文の良さは三つある。一つ目は想像する作文なので楽しいということ。二つ目は書き出し文などを指定することができるので誰でも書きやすいということ。三つ目は表面的なとりつきやすさにもかかわらず「想像」することを出発点として、その子の考え方・感じ方が作文の中に反映される。

## (2) 児童について

3年生の児童は学校生活にもすっかり慣れ、多様な活動を積極的に楽しむことができる時期である。本学級は、男子5・6人の児童が活発で、全体的におとなしくて素直である。

作文に対するアンケートを採ってみた。その結果「作文を書くことが好き」13人(35%)に対し、「好きでも嫌いでもない」または「嫌い」が24人(65%)という結果になった。書くことに対して抵抗がある児童が多いことが分かった。「作文を書くときどんなことに困るか」という問いに対して「何を書いているのか分からない」が最も多く、「書き始めに困る」「考えるのがめんどくさい」などがあげられた。また、「好き」と答えた児童の中には、豊かな表現で巧みに書く児童もいるが、一文をだらだらと長く書く児童が多いことも分かった。

このようなことから、作文に対する抵抗を取り除くとともに、だらだら文を改め中心事項を的確に書くためにいろいろな文の書き方を工夫することが必要である。

## (3) 指導について

児童が書きたくなるような学習活動を心がけたい。そのために児童の書いた短作文の中から楽しくて身近なテーマの作品を紹介し、「わたしにも書けそう」という自信を持たせたい。参考にすることで、友だちから学ぶことができると同時に、何をどのように書いていいか分からない児童にとっては書き方が分かり自信につながるのではないかと考える。

また、これまでに書いてきた題材を使ってテーマを変えて書いてみるなどして繰り返し書くことによって書くことに慣れ、自信もつくだろう。だらだら長い文を改めるために書く時間と分量を決めておく。そうすれば短かい文の中にも書きたいことが表れてくるのではないだろうか。また抵抗のある子がいれば作文が好きな子もいる。そのために、テーマや作文用紙を選択させることも工夫の一つだろうと考える。選択することで気軽に取り組み、書き進めることができることを願う。

## 5 単元学習計画

時	学習活動	教師の支援	評価の観点
1	○朝目がさめると、なんと・・・ 「はじめ」「つぎに」「さいごに」 のことばを使って、空想したお話を 書く。	・書きやすくするため書き出しの文を決めて「はじめ」「なか」「おわり」の構成で作り話を書かせる。	・始め、なか、終わりの順で文を構成することができる。
2	○えんぴつおしゃべり 「給食」をテーマに2人で対話を 進める。	・会話文であることを意識するため必ず「 」をつけさせる。	・会話の言葉で書くことができる。
3	○スケッチ作文（教室編） 教師の動作に集中させ、見たことを自分なりの言葉で書き表す。	・同じ動作を見ても、一人ひとり表現が違うことを気づかせる。	・見たことを自分なりの言葉で表すことができる。
4	○もしも校長先生だったら もしも校長先生になったら〇〇したいという願望や抱負を書く。	・想像が広がるように何でも書いていいことを知らせる。	・想像しながら、思いを書くことができる。
5	○作文アラカルト（交流の場） 友だちの書いた作文を読み合い、紹介する。	・作品の善し悪しではなく、良さを見つけさせる。	・友だちの作文から学ぶことができる。
6	○スケッチ作文（校庭編） 校庭で見つけたものをよく観察し文に表す。	・対象をよく観察させ、ことばで表すことができるようにする。	・観察したことを言葉で表すことができる。
7 本 時	○作文えらべたよ これまでに書いた題材の中から書きたい作文を選び、書く。	・書きたい題材を選ばせる。	・進んで書くことができる。
8	○作文アラカルト（交流の場） 前時で書いた作文を発表し、感想を手紙に書いて知らせる。	・表現の上手なところや頑張ったところを見つけさせる。	・友だちの作文から学ぶことができる。

6 本時の学習 (7/8時間)

平成14年6月27日(木) 2校時  
 浦添市立浦城小学校 3年3組  
 男子20名 女子17名 計37名


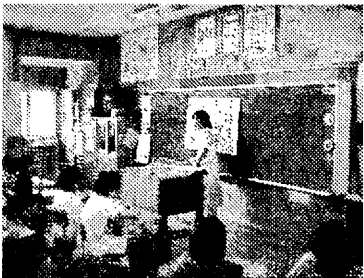
(1) 目標

学習した題材の中から書きたい作文を選び、楽しく書くことができる。

(2) 授業仮説

- ①児童の興味関心のある学習材を取り入れることで、作文に興味を持つことができるであろう。
- ②選択する場を設定することによって、気軽に取り組み楽しく書くことができるであろう。

(3) 本時の展開

	学習活動	教師の支援	評価の観点
導 入	1 今日のめあてを確認する。  <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; display: inline-block;">                     楽しく作文を書こう                 </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発言しやすい雰囲気にするためリズムにのせる。</li> </ul> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ことば遊びを楽しんでいるか。(関心・態度)</li> </ul>
	2 簡単なことば遊びをする。 わたしの好きな○○		
展 開	3 ことば遊びから全員で詩を作る。  	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身近なことばをつなげるだけで詩ができる喜びを味わわせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・書きたい題材を選ぶことができる。(興味・関心)</li> </ul>
	4 これまでに書いた題材の中から書きたい作文を決める。 <ul style="list-style-type: none"> <li>◇朝目がさめるとなんと</li> <li>◇えんぴつおしゃべり</li> <li>◇スケッチ作文</li> <li>◇もしも校長先生だったら</li> <li>◇わたしのすきなもの</li> </ul>		

- ・選んだ作文コースに名前カードを置く。



- ・黒板に名前カードを置くことで一目で全体の様子を知ることができる。

- ・作文用紙を選ぶ。

- ・意欲をもたせるために多様な作文用紙を用意する。

- ・書く時の約束を知らせる。

- ・10分間で書きあげること
- ・作文用紙1枚に書くこと
- ・わかりやすく書くこと

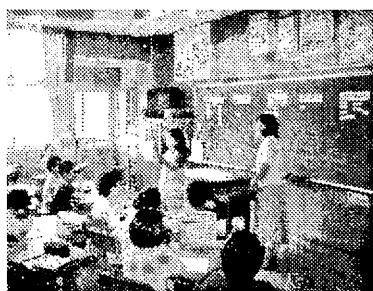
#### 5 作文を書き進める。



- ・書きにくそうにしている児童には、この児童の特徴がつかめるように支援する。

- ・進んで書いているか。  
(関心・意欲)

#### 6 各コースの作文の中から1点ずつ発表する。



- ・わかりやすく書いているか。(表現)

ま  
と  
め

#### 7 今日の感想を発表する。

- ・今日のめあてと作文の約束について評価する。

### (4) 評価

- ・楽しく作文学習に取り組むことができたか。
- ・学習したことを生かして進んで書くことができたか。



## IX 結果と考察

### 1 作業仮説 (1) の検証

子どもが書きたくなるような題材を取り入れ、個に応じた指導を工夫すれば、書くことに対する抵抗が薄れ楽しんで書くことができるであろう。

#### ① 題材について

ア 子どもに興味がある題材で書くことへの抵抗をなくすということで、「朝目がさめると、なんと」を第1時に取り上げた。題名を板書するだけで「おもしろそう」という反応があった。書きやすくするために書き出しの文を示した。空想話でもあるので書きやすかったようで、全員がすらすらと短い時間で書き終えた。学習前に採ったアンケートで「作文を書くのは嫌い」と答えた子達もこの題材は喜んで書いていた。「えんぴつおしゃべり」もおしゃべりの感覚で書けるから喜んで取り組んでいた。

イ 「もしも校長先生だったら」の作文では、自分の思いや願望が書けるので、どんどん思いつくのかどの子もすらすらと書いていた。

短作文「朝目がさめるとなんと」

朝目がさめると、なんと物たしの体は、大きなカタツムリになりました。  
はじめに、お母さんに会いました。  
「うわぁ、なんだこれは」と目を丸くしてびっくりした声で、お母さんが言いました。  
つぎにお店へ行きました。  
「こんな大きいカタツムリは見たことない」とお店の人が言いました。  
家ぞくのみんなが、「すごい」と言いました。

短作文「もしも校長先生だったら」

もしも校長先生だったら、  
朝目がさめると、なんと物たしの体は、大きなカタツムリになりました。  
はじめに、お母さんに会いました。  
「うわぁ、なんだこれは」と目を丸くしてびっくりした声で、お母さんが言いました。  
つぎにお店へ行きました。  
「こんな大きいカタツムリは見たことない」とお店の人が言いました。  
家ぞくのみんなが、「すごい」と言いました。

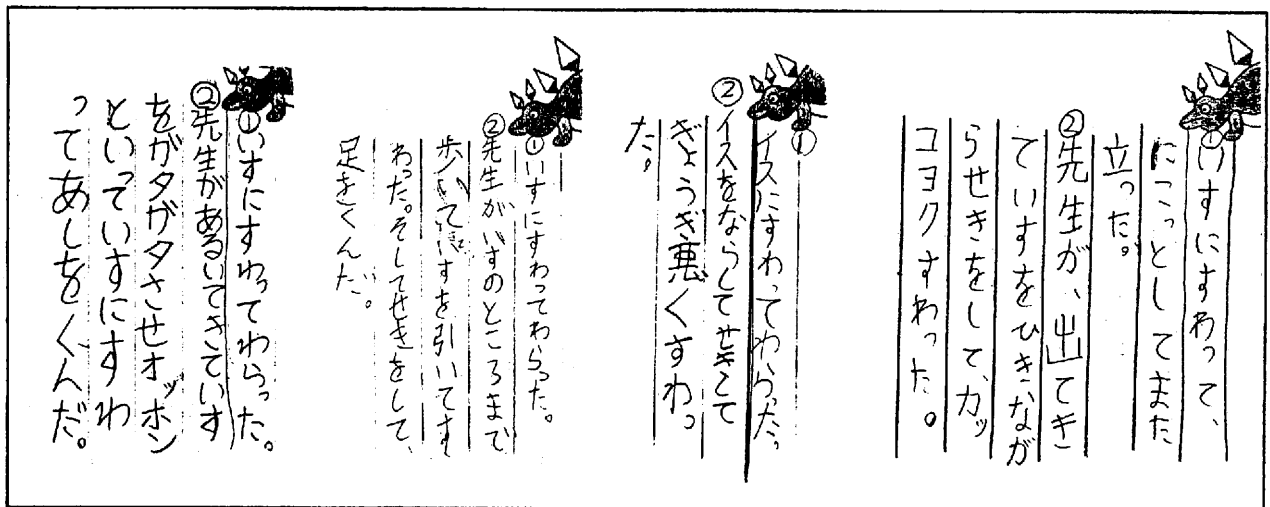
ウ スケッチ作文では、教師の動作をよく見て自分なりの言葉で書き表そうという作文を書かせた。

- ①教室の入り口から教卓前まで歩く。
- ②咳をする。
- ③椅子に、脚を組み座った。

の動作をした。

3つの動作がうまくとらえられればよいのだが、書けてない子が多く「先生がいすに座った」という一文だけの文が多かった。それで、3つの動作を書く視点を話し合うと詳しく書くようになった。

また脚を組む姿勢を言葉で表現するのに困り、「あしの上にあしをのせた」「ぎょうぎわるくすわった」などと書いていた。



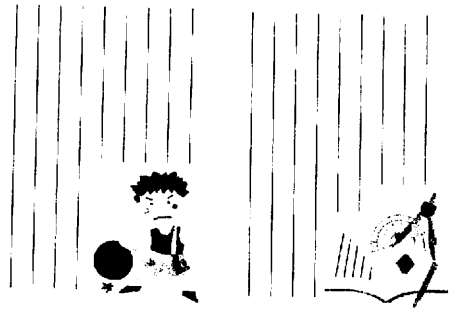
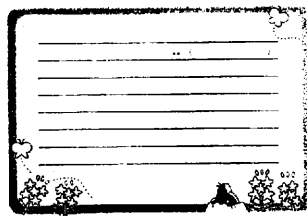
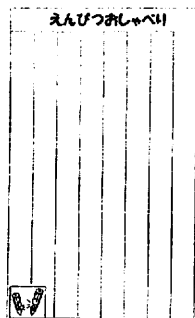
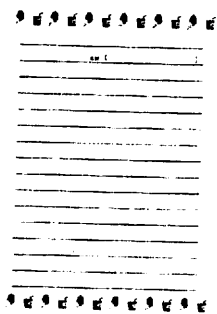
最初に書いた①は、一文だけで表している。  
②は、視点を話し合った後に書いた文

## ② 個に応じた学習の工夫

### ア 作文用紙の工夫と選択

絵を入れた作文用紙や分量の違う作文用紙を作成して選択させた。苦手な子は字数の少ない用紙を選び「全部書けた」と満足していた。他にも「少ない方(分量)が書きやすい」「今日とはどんな用紙を用意してきたの?」「家でも書いてくれるのもっと欲しい」というさまざまな声が聞こえた。

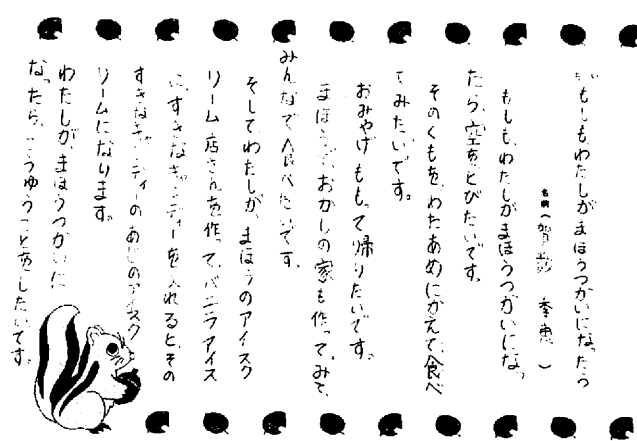
作文用紙



### イ 題材の選択

- ・第7時で題材の選択という方法を試みてみた。  
前に一度書いたり友だちの作文を聞いたりしているので、書きやすいと思ったのか書きたい作文をすぐに決めることができた。
- ・5つの作文コースに名前カードを置いてもらったので、どの子がどの作文を選んだのか一目で分かった。(写真)





「もしも校長先生になったらのテーマをかえて書いた文。いろいろなテーマで思い思いに書いていた。」

③ 作文に対する意識

児童の興味関心を取り入れた学習の工夫として「子どもに身近で面白そうな題材」「作文用紙の作成」「作文用紙の選択」「題材の選択」などの実践を行った結果、実践前と実践後の作文に対する好き嫌いのアンケートの結果は右の表のようになった。

表1 アンケートから

作文を書くのは好きですか	実践前	実践後
ア 好き	13人	32人
イ 好きでも嫌いでもない	10人	4人
ウ 嫌い	14人	2人

作文学習をしての感想を書いてください。

いろんなべんきょうをしてたのし  
かったです。作文がすこしすき  
になりました。また書いてみた  
いです。

すきいながら作文がどんどんすきに  
なりました。もと、いろいろな作文を、  
のり子先生と、いっしょにかきたいです。

まはは さくぶんをなして  
かくかかんかいてたりしていた  
けど、すらすらかけるようにな  
りました。

ぼくがにがてな作文がかけな  
かったのが、新城徳子先生  
とやったからすきになりました。

考察

- ・どの作文でも題材のおもしろさにひかれたようで喜んで書いていた。それにイラスト入りの好きな用紙に10分間という短い時間ということで、どの子も集中してすらすら書いていたので前より抵抗は薄れたのではないと思う。
- ・表1のアンケート結果からも分かるように「作文を書くのは嫌い」が14人から2人に減った。また「嫌い」と答えた子の感想に「作文を書くのは嫌いだけどおもしろかった」とあったので題材の選択を設定したことで自分に合った題材を見つけて書くことができたということがいえる。
- ・スケッチ作文で「足を組む」の表現に困っていた子が多かったので、語彙を広げる指導が必要であると感じた。

## 2 作業仮説（2）の検証

短作文学習を帯単元に位置づけ、年間を通して教科書単元と関連させながら指導していけば、書く力が育つであろう。

- ・帯単元を作成し、その中の単元「鉛筆が進むよ」の授業を実践した。
- ・「えんぴつおしゃべり」では、会話文であるので「 」を使うことを確認してから書き始めた。二人で協力して書くので教え合うこともでき全員の子が「 」をつけることができた。
- ・段落ごとにできごとのまとまりを意識させるために、「朝目がさめると、なんと・・・」の作文で「はじめに」「つぎに」「さいごに」の言葉を示しながら、一緒に書き進めた。

### 考察

- ・確認して直後に書いた作文なので、「 」を正しく使ったり段落でまとまった文を書くことができた。
- ・今回の授業では「気軽に書ける」「進んで書く」ことがねらいで、教科書教材との関連がもてなかった。2学期の単元「鉛筆広がり」「鉛筆まとまる」で教科書教材の「手紙作文」・「おにたのぼうし（文学教材）」「まとまりをかながえて」などの教材と関連させながら短作文の継続で書く力の定着を図っていきたい。さらに短作文年間計画のもとで進めていくうえで、子どもの実態に合わせて計画を見直しながら柔軟に進めていきたい。

## 3 作業仮説（3）の検証

書いた作文を交流する場を設定することにより、友達の良さを認め合うことができ、次への書く意欲も高まるであろう。

- ・早く書き終えた子は互いに交換して読み合わせ、その後は全体の場での発表を進めた。授業を重ねるにつれて「読みた〜い」という手が挙がるようになり、また「次の時間に読んでね（紹介してね）」と話しかけながら提出する子も出てくるなど、授業への参加意欲の向上が感じられた。
- ・友だちの作文を読んだり聞いたりした後、感想を手紙に書いてあげることにした。表現の上手なところや書き方を学んだところ・上手くなったところなどを伝えていた。
- ・5種類の作文を題材別に作文集にし、一週間教室に置き読ませたところ、休み時間に読んで楽しんでいた。

①「もしも校長先生だったら」  
 ②「もしも朝ごはんがおいしくなったら」  
 ③「もしも今日朝ごはんを食べたら」  
 ④「もしもパンとココアだよみゆう」  
 ⑤「もしもパタートンとあしひこが」  
 ⑥「もしもそうなんだそんなにおいしいの？」  
 ⑦「もしもリクスターとあしひこが」  
 ⑧「もしもパンとココアだよみゆう」  
 ⑨「もしも朝ごはんがおいしくなったら」  
 ⑩「もしも今日朝ごはんを食べたら」  
 ⑪「もしもパンとココアだよみゆう」  
 ⑫「もしもパタートンとあしひこが」  
 ⑬「もしもそうなんだそんなにおいしいの？」  
 ⑭「もしもリクスターとあしひこが」  
 ⑮「もしもパンとココアだよみゆう」  
 ⑯「もしも朝ごはんがおいしくなったら」  
 ⑰「もしも今日朝ごはんを食べたら」  
 ⑱「もしもパンとココアだよみゆう」  
 ⑲「もしもパタートンとあしひこが」  
 ⑳「もしもそうなんだそんなにおいしいの？」  
 ㉑「もしもリクスターとあしひこが」  
 ㉒「もしもパンとココアだよみゆう」  
 ㉓「もしも朝ごはんがおいしくなったら」  
 ㉔「もしも今日朝ごはんを食べたら」  
 ㉕「もしもパンとココアだよみゆう」  
 ㉖「もしもパタートンとあしひこが」  
 ㉗「もしもそうなんだそんなにおいしいの？」  
 ㉘「もしもリクスターとあしひこが」  
 ㉙「もしもパンとココアだよみゆう」  
 ㉚「もしも朝ごはんがおいしくなったら」  
 ㉛「もしも今日朝ごはんを食べたら」  
 ㉜「もしもパンとココアだよみゆう」  
 ㉝「もしもパタートンとあしひこが」  
 ㉞「もしもそうなんだそんなにおいしいの？」  
 ㉟「もしもリクスターとあしひこが」  
 ㊱「もしもパンとココアだよみゆう」  
 ㊲「もしも朝ごはんがおいしくなったら」  
 ㊳「もしも今日朝ごはんを食べたら」  
 ㊴「もしもパンとココアだよみゆう」  
 ㊵「もしもパタートンとあしひこが」  
 ㊶「もしもそうなんだそんなにおいしいの？」  
 ㊷「もしもリクスターとあしひこが」  
 ㊸「もしもパンとココアだよみゆう」  
 ㊹「もしも朝ごはんがおいしくなったら」  
 ㊺「もしも今日朝ごはんを食べたら」  
 ㊻「もしもパンとココアだよみゆう」  
 ㊼「もしもパタートンとあしひこが」  
 ㊽「もしもそうなんだそんなにおいしいの？」  
 ㊾「もしもリクスターとあしひこが」  
 ㊿「もしもパンとココアだよみゆう」

もしも校長先生だったら  
 \*\* (ひがみん )  
 もしも校長先生だったら、ほらあちこちで一日ゆくりすごしたいです。  
 毎日、日曜日も休みたいにゆくりたいです。学校も、し  
 びきあるから、そこが、おもしろいです。  
 もしも校長先生だったら、そんな生活がしてみたいです。



みく、くまにならって、まったりするのはいい考えた  
 ね、みゆうもそんなことしたいなと毎日  
 思っていたけれど、作文に書くことが  
 なくて思っていたけれど、たぶん、今、こ  
 んなことを書いてはいいんだと、べん  
 きょう、うらなれた、みく、みく、みく、  
 こんなことも考えうるか、みく、

みゆうさんとあいかさんの、えんぴつあし  
 ぱりをきいて、じぶんが、いい、いい、いい、  
 ちゃんと書いたところ、かいいな、思いま  
 た。

みなさんはほんとうにえが  
 い、みゆう、マンガが、か、か、か、か、  
 いると、田心、います。つくった  
 えんぴつ、マンガ、か、か、か、か、

みゆうさん、いろいろな  
 い、か、か、か、か、か、か、  
 よう、す、け、よ、り

みなさんは「もしも校長先生だったら」  
 を書いて、いろいろなすてい、わたくし、  
 わかり、人の名前、書いて、書いて、  
 ちゃんと、やりたい、ことも、書いて、  
 しよう、す、て、い、た、

**考察**

- 交流の場を設定し友達の作文を読んだり聞いたりすることによって、自分の文との違いに気づき、学ぶ場面も見られた。また作文以外の面で友だちの良さをみつけることへもつながった。休み時間に「家で書いたマンガを読ませてね」という声が聞こえた。
- 思いがけないことに「もしも校長先生だったら」の3人の子の作文を全校朝会で校長先生から紹介され、作文を書くことが苦手だったYさんは、自信へとつながったようである。

**X 研究の成果と課題**

**1 成果**

(1) 子どもに身近で興味のある題の作文を短時間で四百字以内を書くという学習で、作文に抵抗を感じていた子が楽しんで書けるようになった。興味・関心のある題材の開発と子どもに個に応じた題材を選択させることで意欲が高まった。

- (2) 実践後のアンケートで「作文を書くのは嫌い」という子が減ったので、短作文の授業を重ねるうちに書き方を学び自信へとつながっただろうと捉える。帯単元のもとで意図的・計画的に指導することの大切さを感じた。
- (3) 作文を読み合ったり文集にするなど交流の場を多く設定することで、自分の作文を見せることを拒まなくなると同時に、友だちの良さを見つける姿が見られた。今後も多様な交流を取り入れ効果的な指導をしていきたい。
- (4) 実践後の感想「また書きたい」「楽しく書けた」「前より書けるようになった」などから書く意欲が高まったと考える。教材研究・準備・指導の工夫などによって子どもが変容するということをあらためて感じた。

## 2 課題

- (1) 今回の実践は、意欲を育てることに重点を置いたので、子どもの表現力・言語事項などの身につけさせたい力は、十分に指導できなかった。年間指導計画の中に位置づけて繰り返し指導していきたい。
- (2) 目的意識を持たせる指導が手薄であった。さまざまな文種で相手意識・目的意識を明確にした授業を展開していきたい。
- (3) 今回は短作文年間指導計画の一部の作文学習であった。これからの指導を続けていくうえで、よりよい学習となるよう子どもの実態に合わせて見直していかなければならない。

## おわりに

この6ヶ月間、楽しい作文学習をめざして研究を進めてきました。これからも研究は続きますが、研究所で学んだことを実践で生かしていこうと思います。たいへん貴重な時間を過ごさせていただきました。

研究を進めるにあたり、ご指導下さいました浦添小学校の玉城きみ子校長先生、そして研修の機会を下さった浦添市教育委員の先生方、浦城小学校の桃原致上校長先生・前校長の宮里政和校長先生・研究を支えて下さった浦城小学校の先生方、また学級を導き見守って下さった町田宗泰先生に心から感謝申し上げます。

そして最後になりましたが、いつも温かく見守り励まして下さった大城淳男所長・當間正和係長・山里昌樹指導主事そして研究所の職員の皆様、共に励まし合い頑張った研究員の皆様にも感謝申し上げます。ありがとうございました。

## 【参考文献・引用文献】

- |                                |                    |
|--------------------------------|--------------------|
| ・文部省 小学校学習指導要領                 | 文部省（平成10年12月告示）    |
| ・文部省 小学校学習指導要領解説（国語編）          | 文部省（平成11年5月）       |
| ・基礎的・基本的事項事例集（小学校国語）           | 沖縄県教育委員会（平成14年1月）  |
| ・評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料     | 国立教育政策研究所（平成14年2月） |
| ・石田佐久馬 どの子ども書きたくなる作文指導のアイデア 58 | 株式会社 小学館           |
| ・片平 忠秀 いつでもどの子どもスラスラ書ける作文指導    | 株式会社 小学館           |
| ・指導主事研究報告書                     | 那覇市立教育研究所（平成13年3月） |
| ・教育研究員報告書（第73期）                | 那覇市立教育研究所（平成12年3月） |